

特別寄稿

話し言葉を文字で表すことのむずかしさについて

松田弘子
(俳優、青年団)

要旨

舞台俳優の立場から、話しことばを文字化した際に生じる曖昧性について論じる。曖昧になる要因として、(1)「副詞か、名詞か」、(2)「漢字」、(3)「断ち切りか、言いよどみか」、(4)「倒置か、新しい話題か」、(5)、(6)「あれ」の6つを挙げて論じる。

SPECIAL CONTRIBUTION

Difficulties Involved in Turning Speech into Text

Hiroko Matsuda
(Actress, SEINENDAN)

ABSTRACT

The ambiguities that result from converting spoken words into text are discussed from the perspective of a stage actor. The paper focuses on five factors contributing to such ambiguity, namely 1) adverb or noun, 2) kanji, 3) breaking off or faltering, 4) inversion or new subject, 5) intonation of *wa* (Japanese sentence-ending particle), and 6) *are* (Japanese pronoun meaning *that* or *it*).

◎はじめに◎

話し言葉を書きとめることは、むずかしい。私はそう思っています。まずは、この文章をご覧ください。

人の気持ちわからなさすぎだろ…。何人傷つけてんだよ…。

後半の「何人」の部分で、どう読まれましたか。最初の文からのつながりで、これは相手のことを、「他人の気持ちを理解せず、傷つけている」と責めているんだなということがわかると思います。その流れで後半を考えていくと、「何人」の解釈が二通りできるのではないのでしょうか。「なにひと」と読んで「どうしてこんなふうになんか人を傷つけているのか」ととって、「なんにん」と読んで「いままでどれだけの人を傷つけてきたのか」という意味ととって、どちらも成り立つように思います。

もう一つ例を挙げます。

「これでいいのかな？」

「そうじゃない。」

この会話の「そうじゃない」が、「うん、そうだと思うよ、よく知らないけど。」とぶっきらぼうに肯定しているのか、「ちがう、そうではない。」と否定しているのか。これも、字面だけから考えたらどちらも成り立つように思えるんじゃないでしょうか。

私は、舞台上で仕事をしている俳優です。それ以外に、英語と日本語の翻訳・通訳もやります。言葉というものにたいへん興味があります。私がおもにやっている演劇は、「現代口語演劇」と呼ばれる、日常会話に近い台詞を話すタイプの演劇です。翻訳のほうも戯曲翻訳が中心で、どちらの場合も話し言葉を取り扱っています。言葉との向き合い方ということで言えば、俳優のときは「他人が書いた話し言葉をしゃべる」立場、翻訳者のときは「自分が書いた話し言葉を他の人にしゃべってもらう」立場です。

そのように、「文字として書かれた話し言葉」を、自分がしゃべったり人にしゃべってもらったりして、つくづく思うのは、話し言葉を書きとめるのはむずかしい、ということです。むずかしいというか、話し言葉を文字にすると、強弱、高低、どこに間が入るか、といった音声的な情報がなくなってしまうため、いきなり意味が曖昧になってしまうのです。そして、どうも書き手側はそのことにあまり自覚的でないようで、そのこと自体がこの問題をさらに複雑にしているように思います。書くほうは、頭の中でその言葉を「声に出して」言っていて、それをそのまま書き留めているから、当然読む人も自分と同じように受け取ってくれるんだと思ってしまうのではないのでしょうか。私はそう推察しています。

また、「何人傷つけてんだよ…。」の意味などは前後関係で特定されるだろう、とお思いになるかもしれませんが、演劇のリハーサルに俳優あるいは戯曲を翻訳した者として立ち会ってきた経験から言うと、そうでもないようです。人がしゃべるのを聞いていて、私としては

納得できないけれども演出家が特に問題にしていない、という場面に多々遭遇してきました。個人のコンテキストというのでしょうか、物事をどう捉えているか、どう理解しているかは、私たちが思う以上に人によりばらばらなんだと思います。たしかに、演劇のリハーサルというのは「戯曲に書かれているすべての可能性を検証してみよう」という場ではあるので、日常生活だったら当然排除して考えるようなかすかな可能性まで吟味するという面はあると思いますけれども（そしてそういう場であることがわかっているからこそ、翻訳者として戯曲の台詞を訳すときには、原文よりも解釈の余地を広くしたり狭めたりしてしまわないように気をつけています）。

ここまでに述べたことは、

- ・話し言葉を文字化すると、音声情報が失われて曖昧性が増す
- ・しかし、話し言葉を文字化する人は、どうもそのことにあまり自覚的でないようだ
- ・さらに、文字化された話し言葉の解釈は、人によってだいぶちがう場合がある

ということです。俳優として他人の言葉をしゃべる立場としても翻訳者として自分が書いた話し言葉をしゃべってもらう立場としても、こういう曖昧さはないほうが助かります。それで、どういうときに曖昧になるのか、そしてその曖昧さをなくすにはどうしたら良いのだろうか、ということ、私は、ここ十年くらいゆるゆると考え続けています。

以下では、そのことを項目別に分けてお話ししたいと思います。今の時点での中間報告のようなものになるかと思っています。

◎曖昧になる例1「副詞か、名詞か」◎

人生の全盛期に突然死に見舞われるなんて、ひどすぎる。

この文では、「突然」が時をあらわす副詞なのか、それとも「突然死」ととるべきなのか、曖昧です。「日曜学校に行きたくないなあ。」（日曜日にということなのか、「日曜学校」なのか）など、類似例をけっこう多く見かけます。

後ろにちゃっかりマチコさん写ってるんだもん。

この例は、たぶん「ちゃっかり写っていた」という意味だろうと思いますが、「うっかり八兵衛」（TV番組「水戸黄門」の登場人物）のように「ちゃっかりマチコさん」と呼ばれている人がいるという解釈も成り立ってしまう。考えすぎといえば考えすぎなんですが、最初にこの文を（実際にしろ、頭の中でしろ）言ったときには一つの解釈しかなかったはずで、それなのに文字にしたことで曖昧になってしまう、他の解釈の余地ができてしまう、というところをいま問題にしています。

文章の書き方指導では、「修飾語と被修飾語はなるべく近づけて書くように」と言われます。「突然」「ちゃっかり」が副詞ならば、修飾する動詞と離さないようにすればたしかに他の解釈を生みません。だから、「人生の全盛期に死に突然見舞われるなんて、ひどすぎる。」「後ろにマチコさんちゃっかり写ってるんだもん。」のように語順を変える、という案もあるかと思いますが、話し言葉としてその語順で言うにはその語順で言いたい何かやむにやまれぬものがあるはずですし、耳で聞いて受け取る印象も語順によってちがってきますから、「書いたときに曖昧になってしまう」という理由だけで語順を直すのはできれば避けたいです。

人生の全盛期に突然、死に見舞われるなんて、ひどすぎる。

と読点を打つ、という方法も考えられますが、そうすると今度は読点の位置で間を取らないといけないと思う読み手が出てくるので注意が必要です。私は、書くときに打つ句読点は読む／話すときに区切る位置と必ずしも一致するものではない、と考えているのですが、「句読点も含め、台本は一字一句書かれた通りに言わなければいけない」と考えている人もいますので、戯曲翻訳をするときには私の姿勢を冒頭などに「翻訳者より」というような形で書いておくようにしています。

読点（、）で必ずしも言葉を切らなくてかまいませんし、読点のないところで言葉を切ってもかまいません。

また、どうしても文中に説明書きのようなものを追加する必要がある出てくるので、使用する記号についても最初に断っておきます。

（ ）は、もともとの英語戯曲にあるト書きです。

【 】は、翻訳者が追加した、日本語版用のト書き・説明書きです。

〔 〕も、翻訳者が追加しました。省略された助詞、断ち切られる語尾等を、説明のため書き加えたものです。〔 〕内は、発語しません。

これにしたがって書いてみます。

人生の全盛期に突然【←副詞です。「突然見舞われる」の意。「突然死」ではありません】死に見舞われるなんて、ひどすぎる。

後ろにちゃっかり〔と〕マチコさん〔が〕写ってるんだもん。

非常に散文的で、字面としては美しくないかもしれませんが、曖昧さはなくすことができると思います。話し言葉は助詞の省略などが多いので、発話されない部分をカッコ書きする方法が有効な場面はいろいろとあります。

◎曖昧になる例2「漢字」◎

耳で聞いたときにはまったく問題ないのに、漢字を使って書くと途端に他の解釈が可能になってしまう場合があります。

フランス人の方（ほう／かた）にも聞いてみなさい。

松田さん、スタートレック好き（ずき／すき）だからな。

何時（なんじ／いつ）だっていいじゃないか。

駆け込み乗車は、止め（とめ／やめ）なきゃ。

やっぱり、話したい（はなしたい／はなししたい）よね。

他にも、「家」（いえ／うち）、「私」（わたし／わたくし）、「良い」（いい／よい）、「空いて」（あいて／すいて）、「開いて」（あいて／ひらいて）など、書いた人と読む人で読みに差が出る可能性のある言葉は、意外にたくさんあります。「床」（とこ／ゆか）のように、あまりにも違う二つのものを同じ漢字が指し示すのにはビックリします。

私は、上演台本は目で読むためではなく耳で聞いてわかるためにあると割り切って、「いえにいます」「知り合いのかたにも声掛けてみてください」「まえにはなしたことあるよね」というように平仮名で書くことが多いですが、「はなした」はあまりに間抜けに見えるし、逆に「離れた」や「は成した」に誤解されないとも限らないので、困っています。

二重母音と長母音という問題、つまり、「文明」「先生」を、「ぶんめい」「せんせい」と発音する人もいれば、「ぶんめい」「せんせい」と発音する人もいる、ということもあります。他にも、「洗濯機」（せんたつき／せんたくき）、「体育」（たいく／たいいく）、「唯一」（ゆいつ／ゆいいつ）、「もう一回」（もっかい／もいっかい／もーいっかい）など、漢字がらみで微妙な例は他にもあると思います。

これは、漢字のことばかりではなく、表記と実際の発音のずれをどう捉えているかが人によって違う、という問題にもつながってくると思います。「しょうがない」と「しょうがない」を区別して使っているのか、いないのか。「すみません」と書いてあるのを「すいません」と読んでよいのか、ダメなのか（私は、どちらかという「すいません」と発音してほしいですが、「すみません」でもいいです。書くときに「すいません」と書くのには抵抗があります）。漢字で「私」と書いてあったら、「あたし」と読んではいけないのか（私は、「あたし」と読んでかまわないと思っています）。「こういうふうに」「そういうふうに」も、日常会話の実際では「こゆふに」「そいふに」ぐらいの発音になっているので、台詞になった場合にあまり明瞭に発音されるとおかしく感じられます。「格好良い」「大丈夫」なども、「かっこいい」「だいじょぶ」に近い発音のほうが自然なのではないでしょうか。

そのような発音の違いを明確に区別したい書き手もいれば、どちらでも良い、しゃべる人に任せる、という人もいます。どちらでもかまわない場合はよいのですが、「どうしてもこう読んでもらいたい」という場合は、上記のような曖昧性出現の可能性を想定して、ひらがなで書くなり読み仮名をふるなりもっと発音に近い独自の表記を使うなその旨注意書きを入れるなどの対策をとる必要があります。そのことを話し言葉の書き手はわかっているほうがよいと思います。

◎曖昧になる例3「断ち切りか、言いよどみか」◎

「だって……」というように、「……」で終わっている台詞は、次の台詞に断ち切られるから途中で終わっている（すぐに次の人の台詞が始まる）のか、言いかけて言いよどんでいる（この台詞の後に少し間があく）のか、読んでいて判断ができなかったりどちらでも良いように思われることがあります。「……」は、「言いたいことを全部言い切れなかった」という話し手の主観によりそった表記なんだと思います。言葉につまみままで言えなかった場合も、だれかの発言にさえぎられて文を終えられなかった場合も、その点では同じなので、書くときどちらも「……」を使ってしまうんだと思います。

間が入るのか、次の台詞に断ち切られるのか、明確にしておきたいならば、なにか策を講じたほうがよいです。

私の所属する劇団青年団の劇作家平田オリザは、間があくところには「○」、言いかけて他の台詞に断ち切られるところには「/」という記号を入れるという方法を使っています。たとえば、

「だって……」
「だってじゃないでしょう」

という会話があったとして、平田オリザ方式で書くとすると、「だって……」と言いかけているのをさえぎって次の人がしゃべっているのならば、

「だって/」
「だってじゃないでしょう」

そうではなく「だって」と言ったあとに間が入るのであれば、

「だって」
「○だってじゃないでしょう」

とすることによって、「断ち切りか、言いよどみか」を書き分けています。断ち切られるときは「—」間があるときは「…」というように記号を使い分けたり、「(さえぎって) だっ

てじゃないでしょう」のように言葉で指定したりしている劇作家もいらっしゃいます。

私が以前翻訳したある戯曲の場合は、以下のような注意書きをつけました。

文末の「……」は、「言いよどむ」（つまり、この台詞の後に間がある）ことを表している場合と、「しゃべっている途中で次の台詞に断ち切られる」（つまり、次の台詞との間に、間がない）ことを表している場合があります。英原文でどちらも「…」になっているので、日本語でも「……」にしています。間なのか断ち切りなのか、現場での判断をお願いします。文頭の「……」も同様。

◎曖昧になる例4「倒置か、新しい話題か」◎

わかるだろう、そんなの……

そんなことないよ、だって……

3の特殊な形ともいえますが、「そんなのわかるだろう」「だってそんなことないよ」の倒置という解釈と、後半は新しい話題を導入した（んだけどその後絶句するか他人の発言にさえぎられるかした）という解釈が成り立ちます。「言いよどみか断ち切りか」という問題は、平田オリザ方式の「○」「／」の導入などで解決できると思いますが、「倒置なのか、新しい話題の導入なのか」というのをはっきりさせるためには別の注意書きなりが必要になると思います。

経験から言って、このような台詞は、演劇のリハーサル場で、人によって解釈が違う場合が多いように思います。その（自分の）台詞が倒置だと思っていれば、すぐに次の人が次の台詞を言わなくても問題ありませんが、本人が自分の台詞を「新しい話題の導入」だと解釈していると、次の台詞でさえぎられないとおかしいわけで、いつか稽古場の雰囲気はぎくしゃくしたりします。こんなとき、書いた人の意図があらかじめわかっていたら良いのになあと思います。

◎曖昧になる例5「お嬢様の『わ』かお婆さんの『わ』か」◎

やっつけられないわ、ホントに。

「わ」を上がり調子で言うのか（お嬢様）下がり調子で言うのか（お婆さん）によって、まったくニュアンスが違ってしまいます。どちらに解釈しても良いなら別ですが、書き手がどちらかの言い方を想定しているならば、上がり調子か下がり調子か指示することにより逆の言い方と誤解されることを防ぐことができます。

◎曖昧になる例6「あれ」◎

そういうのあるでしょ、あれ、なんて言ったっけ、ねえ。

「あれ」が感動詞なのか指示代名詞なのか判然としない場合があります。「あれ？」と疑問符が付いていれば指示代名詞ではないとはっきりしますが、疑問符が付いていないから指示代名詞のほうだと判断してしまっているのか、躊躇します。以下のようになっていれば一つの解釈に限定できます。

そういうのあるでしょ、あれ〔は〕、なんて言ったっけ、ねえ。

この例から話は外れますが、疑問符もまた、なかなかむずかしいです。それは、疑問符のあるところを上がり調子に読む人がいるからです。

**「きのう行ったんだ」
「そうだよ」**

という会話の、「きのう行ったんだ」は、「あなたはきのう行ったんだね？」と確認している文です。「そうだよ」という反応を引き出してるので、働きとして疑問文だと私は思っていますが、口に出して言うときは語尾を上げては発語しません。そして、主語がないこともあり、上のように書いたのではあまりよく理解してもらえない恐れがあります。でもここで「きのう行ったんだ？」と書くと(実際、そのように書かれた台本を受け取ったこともあります)、疑問符につられて上がり調子に読む人が出てきて、そうすると聞いていてよくわからないやりとりになってしまいます。それで私は、

「きのう行ったんだ【疑問文ですが、語尾はあがりません】」

というような説明を加えることにしています。

文の末尾に付け足しで何か言っている疑問文も、どう書くかむずかしいところです。「？」はふつう文末につけますが、

どうだった、試験？

と書いてあると、「試験」の最後を上がり調子に言う人が出てきます。書いたほうの意図としては、そうではなく「どうだった」のところで上がってほしいのです。それで、

どうだった？試験。

というふうに私は書いています。逆に、俳優として脚本を読む場合には、疑問詞の位置にとらわれず、「これは、この文が疑問文であるというしるしである」とだけ解釈するようにしています。もちろん、書き方は人により違いますので、「この作家の場合、疑問詞のところを

上がり調子で読んでもらうつもりで書いている」ということが明確であればそれに従います。

◎おわりに◎

以上、思いつくまま例を挙げ、話し言葉を書きとめたり文字として書かれた話し言葉をしゃべったりする場合にどういう問題が起こるのかということを書いてきました。一応項目分けしましたが、まだ情報収集中の中間報告の段階でもあり、また『話し言葉は文字にすると曖昧になってしまう』ということに書き手も読み手もそれほど意識的ではない」という共通の問題がすべての背後にあると思っていることもあって、あまりきちんと論理的に項目分けができていないように思います。

さらに、このことに対する私のアプローチが、そのような台詞をしゃべる俳優の立場、そのような台詞を書いて人にしゃべってもらう翻訳者の立場、もっと一般的にそのような文章を読む読者の立場というふうに複数の立場からのものであるためわかりにくくなっている部分もあるかと思えます。

というように未熟な文章ではありますが、日本語や表現について興味のある方々にお読みいただき、このような問題を意識して、これから私と一緒に考えていただけたらと思います。今回発表させていただくことにしました。ご意見、ご指摘、ご感想等ありましたら hiroko@letre.co.jp までお知らせいただくと大変嬉しく思います。